

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授承認雜誌第六二七号
平成二十五年四月一日発行（第百十六卷第四号）

ホトトギス

四月号



俳句随想 〔三百七十〕

汀子

日本語は美しいと思う。しかしそれも少しずつ変化して行くのはどうすればいいであろうか。初めに言葉があり、文法はあとから蹤いて来たのであるが、文法の詳しい人にしばしばこれはおかしいと訂正される事がある。例えば、形容詞に「……けり」を付けるのは間違いである。「美しけり」とは言わない。

それから、病後のことを「予後」と使う人がいるが、それは間違いである。「予後」は「病後の予測」という医学用語で「病後」のことではない。正しく「病後」と使って頂きたい。「見れる」は「見られる」としてこれも一時若者の間で「ら抜き言葉」が使われるようになり今では当たり前のように使われていることもある。何となく気になる。

三省堂の歳時記でお世話になった増田正司さんがこの度停年でお辞めになると挨拶に來られた。歳時記の間違いの個所の訂正を話し合い、検討してきたのであるが、まだまだ宿題が残っている。「もみづれる」が間違いであることも、例句に載っているのをどうするか、結論がまだ出ていない。もうこれだけ多くの人が遣っているのだから許容範囲とするか。しかし、例句はやはり差し替えなければならぬと考えている。この前の号で書いた「和風」は辞書に【季】と入っていないから季題ではないと手紙に添えられてあった。

句日記 汀子

平成二十四年四月一日 下朝句会

麗かや枝の主日にある折り色見せてより孤高なる花ミモザ遅れ来る一人に残す桜餅

四月一日 ロイヤル俳壇

又戻る陽気遼巡黄水仙日矢ささるときひと揺らぎ蝌蚪の水もう誰も訪ね来ざりし春の宵春宵や予定組み替へ組みかへて顔ぶれの新四月なりしこと

四月三日 親鸞聖人七百五十回御遠忌讀句記念俳句大会

偲ばるる誰彼花の幾仏花冷も雨も除幕の心添ふ降る雨に濡るるほかなき花衣

四月七日 芦屋ホトトギス会

寿福寺へ花の旅路を結びけり鮎鮎ありし日をふり返る朧かな花の道来しと明るく応へけり朧夜の覚めて予定の走り出す

四月八日 虚子忌

没後半世紀存問虚子忌かな虚子忌とは巡る月日も一瞬に待たれたる花の忌日と申すべし

四月十日 大阪倶楽部

かく荒る勢ひの空と思ひけり薬の方が勢ひありにけり薬に命つなぎて大銀杏志もて継ぎゆかん春の風杏誰彼に会ひし虚子忌となりしこと辛夷咲き思ひ出遠くなりけり

四月十日 綿業倶楽部

縛られし時間ほどきて春の昼満開といふは桜に聞いてみりみ吉野の桜に時間合せけり

咲き進む桜終へゆく桜と春昼の仕事のはざま旅仕度も

四月十日 清交社

みよし森の朧の月日瞬く間雨一と日快晴一と日草朧旅程組む花の遅速を問ひながら朧夜の雨音消えてみし目覚

四月十三日 工業倶楽部

迷はずに辛夷の花の道標華やける春灯点したるよりは天魅羅に春大根の卸し添へ花の羅に春大根の卸し添へ

四月十四日 吉野山くつろぎの旅

胸に吸ふ山氣よ花の吐息とも青空に入れて替る空花誘ふ朝の雨忘れて花下に佇め桜青空の領域ふえてゆく桜わが宿は花に包まれをりしかな刻々と咲き進む山桜かな

第二句会

夜桜に囲まれてゐる静心星を見に出て夜桜に包まるるみよし野の春告鳥もねむりしや誰彼の面影を追ふ春灯花明りよりつながりて七つ星よき知らせ聞かせたまひぬ春灯下

四月十五日 第三句会

今宵泊つ吉野の花に包まれて峰桜より差し初むる朝日かな花の宿とはみよし野の今日のこと花の緑朝日刻々伸びて来し昨日会ひ別るる今日も花の友

第四句会

後ろから呼ばれさうにも花の帰路短冊の色に名残の花の句座

四月十七日 有恒俳句会

みよし野の桜に名残尽きざりし桜見てゐる渋滞に因はるるみよし野の桜に懐古三十年細き月上げ春暁でありしがまど早起きも朝寝も一人ありがこと咲き終へて色失ひし紫荊

四月十七日 無名会

月朧夜半に出てゆく一人かな月朧うすうすと雲置き初めし長閑とは稿債たまるばかりかな旅二日長閑に過ぎてしまひけり筈の約束出来て受話器置くこんなにも長閑な家居なかりけり

四月十八日 夏潮句会

春風の置いてゆきたるもの咲きぬ昭和の日とて若き日の懐古あり庭に咲くもの移るへる春の風本当の黄桜といふ今日の色咲き継げる狭庭の春を惜む日よ耐の過ぎしが見頃チュリップ

四月二十六日 きとらぎ会

新参に我慢させてはならぬこと読み返す便り机上に春の宵みよし野の花忘れゆく日々となる片付けぬ机上の大事春の宵

四月二十七日 時雨会

枝分れして三極の花の位置三極の黄色は遠く見ゆる花の町仕事場の模様替してゐる日永激動の世も風流の世も目永遠足の列の縮演の会

四月二十八日 句会と讀演の会

蛇飛んで雨の上つてをりしかなパター二打三打目に蛇来て止まる滞在の三日目春を惜む晴

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年四月一日 野分会菅屋例会

桜菜降る晩年といふをふと

桜菜降る捜査員走るはしる

桜餅吉野の山気濃き色に

四月三日 親鸞聖人七百五十回御遠忌

句碑を説く高僧の声暖かし

亀鳴くや句碑除幕する雨男

四月五日 カトリック新聞選者吟

暖かき絶句の句碑として永久に

四月五日 蕉心会

一面の土筆野となる野外ミサ

蝌蚪の群先住民を脅かす

蝌蚪群る水の分子を押し退けて

影一つづつの華やぎ蝌蚪の国

蝌蚪生きる証とは影作ること

亀鳴くや勝手知つたる館の庭

椿落つ日に魂を還す時

今日の供華桜を活けてより決まる

強東風に我が髪風前の灯

四月八日 虚子忌

忌日 寺復活祭の昂りに

四月九日 朝日カルチャー若草句会

紫荊空恋ふ色に仕上がりぬ

蒼天に色を貰うて春の水

熊蜂の羽音と判る距離にゐて

春の水凹ませてゐる風の午後
紫荊雲と存問する高さ
蜜蜂に咲くものの四季始まり
春水を蹴つて翔ぶもの泳ぐもの

四月十日 土筆会

百幹に風一つづつ竹の秋

蒼天を引つ張つてゐる花万朶

四月十日 百夜句会

昭和の日平成生れの息子かな

花屑を栞りて今日の日記閉づ

四月十四、十五日 吉野くつろぎの旅

色極め落花始まるまでの黙

夜桜となる妖しさを秘めし色

熊野より吉野へ花を綴る旅

紀伊半島一周廻り花に着く

朽ち果てし茶屋の奥より亀鳴けり

夜桜を染め上げてゆく山気かな

満天の星に貫ひし花明り

満天の星は臍を解きゆく

アニメズムには臍夜がよく似合ふ

麗かや茶屋を買ひ取る話など

四月十七日 草木瓜会

花絵巻とは一片の舞うてより

来年の花へ明日より心馳せ

田楽に吉野の旅を締めくくる

蚕豆の花天を恋ふ角度かな

昭和の日嗚呼広島よ長崎よ
旅終へて春あかつきの目覚良き
遠山はまだまだ白く雪柳
四月二十日 野分会東京例会
桜菜降るたましひを置き去りに
桜菜降る一片を褥とし
桜餅吉野温泉元湯の香
四月二十三日 むさし野吟行会
虚子の字に囲まれ藍花亭ぬくし
春惜む仮発行所資料室
春灯下魂宿る遺墨かな
四月二十四日 若水句会
麗かや結婚記念日の我に
桜餅狐出さうな吉野かな
七色の風船七彩の瞳
麗かや三十年を経し江戸暮し
桜餅葉にも主張のありにけり
四月二十五日 目黒学園句会
舞ふごとく一人静の咲き初めし
一切を省略したる臍かな
抜きん出て一人静といふ孤独
鎌倉に縁深めて花祭
木星を潤ませ臍月夜かな
花祭一年生になりし吾子
四月二十八日 ホトギス社句会
蛇寄せて山の暮しの始まり
惜春の歩幅学生街の午後
四月三十日 「悠」十五周年記念祝賀会
夏近き十五周年てふ熱気

雑詠

廣太郎 選

炉開といふ節目ありうつくしき	檀原 稲岡 長
哀しみの透き通りゆく小春の日	同
樹に凭りて亡き娘を思ふ小春の日	同
仏壇が居場所となりし妻の秋	相模原 木村享史
妻逝きて喧嘩相手もなき夜長	同
亡き妻は斯うした筈と冬支度	同
再会のドアを開ければ冬ぬくし	神戸 山田佳乃
冬の空幸せ色のブーケ跳ね	同
大根のひげを大地に伸ばしけり	同
下宿とは酢莖の桶の横の部屋	箕面 井上浩一郎
色去つて街線描の冬となる	同
風を抱くごとくに歩みけり	同
まづ白の見え来大根を干して家	熱海 嶋田一步
大根干す白さは同じなる隣	同
また一人大根洗ふおしやべりに	同
リーダーといふがゐるはず稲雀	長岡 安原 葉
残暑にも森を抜け来る風のあり	同
継之助五十六の街秋高し	同

渦潮の夕べの色に寒くなる	東京 今井千鶴子
冬靄のこめくる渦をまとふ島	同
渦潮の暮れつつ冬の星ひとつ	同
歳晩や紛れゆく背を紛れ追ふ	香川 湯川 雅
雨宿り一人の寒さ背負ふまま	同
摘みし過去摘まざる過去や野菊径	同
鐘の音を円く包みて冬霞	神戸 涌羅由美
時雨忌やモーツアルトも旅の人	同
マスクせぬ事に厳しき車内の目	同
片陰に横浜の色沈みけり	渋谷 木暮陶句郎
時といふ岸に涼しく氷川丸	同
遠雷に浮かび上がりし大都会	同
買つて出て大根おろしすぐあきる	東京 内藤呈念
チェロ抱へ小春の上野音大生	同
縁先のいぶりがつこや小六月	同
約束を一つ増やして十二月	龍ヶ崎 今橋眞理子
帰り花真白き苔添ふことも	同
風や宇宙まで見えさうな空	同
樹にこだま句碑にこだま山眠る	米子 中村囊介
錆びてゆく彩の深まり冬紅葉	同
白鳥を茜に染めて湖明くる	同
参道の露店気になる七五三	東京 橋本くに彦
夕さればおでん屋台の positioning	同
色変へて音変へて踏む落葉かな	同

雑詠句評（三月号より）

むつみ・中正・憲明

葉・眞理子・とほ歩

保佳・静龍・美奇

千鶴子・廣太郎

火葬場へ導師の鉦の冷やかに

相模原

木村享史

喪中のお葉書を戴き、奥様のご逝去を知りどんなにお悲しみのことかと思っていた時に、この俳句を拝見、心よりお悔やみ申し上げるばかりである。最後の別れである「火葬場」ほどお身内にとって辛い場所はない。「導師の鉦」の音もどんなに寂しく侘びしく作者の胸に響いたことだろう。奥様への「鉦」となればなおのこと受け止める為にこれほどつらいものはない。感情用語は使ってはいないがこの句の一語一語に悲しみが募る。「冷やか」の季題に託した作者の思いが痛いほどよく分かる。奥様のご冥福を心よりお祈り申し上げたい。合掌。（むつみ）

最愛の奥様を亡くされた作者である。そのお悲しみは察するに余りあるが、その事実をしつかりと受け止め、淡々と詠んでおられるところに、より悲しみを覚える。葬儀の後、火葬場に向われる時先導する「導師の鉦」の音が鳴り響いている。何よりも季題「冷やか」が切なく効いている。（廣太郎）

秋惜み受く退任の祝酒

長岡 安原 葉

大役を果たして退任される感慨を卒直に叶露された句である。「秋惜み受く」と語りはじめて、一気に「退任の祝酒」と流れるように詠まれたリズムにも、一事を成し遂げた作者の満足感と、これを支えてくれた周囲への感謝もこめられている。「祝酒」で締めくくって、爽やかな余韻がひろがってゆく。それにしても、ここでの「秋惜む」という季題の働きは大きい。

「春惜む」と「秋惜む」という二つの季題を育んで きた 日本人の感性は、素敵だ。すべてのものには始めがあり終りがある。時やものごとを水の流れのように諾うのが、日本的感性である。しかし同時に、去りゆくものを惜しむ情もまた、美しい。去りゆくことを諾いつつも、ほんの少し心を残すところに詩が生まれ、季題が生まれた。これは、自祝と感謝の爽やかな一句である。（中正）

長い間仏教界の要職に就かれていた作者である。その間もホトトギス同人会長としてのお仕事等俳句関係にも深く携わられておられ、筆者は近く、遠くから垣間見えていて頭が下がる思いであったが、この程仏教界の大役を退かれた由、やれやれという気持ちと共に、季題から、少し寂しさも感じられる。（廣太郎）

天地有情

退任の帰山も祝ひ炉を開く	長岡	安原	葉
ふるさとの小春の縁に寛ぎぬ	同		
人恋ひの暮らしも長く夕時雨	仙台	赤川	誓城
散り際の昂りしづめ城紅葉	同		
梅雨空を引つ張つてゐる橋の先	東京	稲畑	廣太郎
時鳥風が消しゆくほどの距離	同		
帰り来し浜田の神の椎拾ふ	福山	竹下	陶子
ホ句作る老の魂魄冬ぬくし	同		
雪時雨きて何もかも失ひし	岩見沢	奥田	智久
日輪の所在さだかに雪時雨	同		
流星に目の焦点の合ひ初めし	周南	小川	龍雄
末っ子が守る実家や墓参	同		
炉開や塵なき炉辺の塵払ひ	神戸	長山	あや
穂芒や人には見えぬ風に揺れ	同		
早立ちの初霜の径明けの星	東京	河野	美奇
海光に生れては消ゆる帰り花	同		
生涯を諷詠といふ小春抱き	金沢	藤浦	昭代
白山を日溜として時雨空	同		

たまのをも紅葉づる真似をしてをりぬ	神戸	後藤	比奈夫
冬もまた満更ならず冬珊瑚	同		
さまざまな想ひ漠とし唯小春	樺原	稲岡	長
泥鰌掘る備中鍬を振りかぶり	同		
虚子句碑に手を置いてゐる小春かな	東京	今井	千鶴子
城山の冬めく色に日の当る	同		
垂れてゐる朱欒のやうになれたなら	熊本	岩岡	中正
静かなる時の過ぎゆく朱欒かな	同		
青空に形見のごとく帰り花	東京	山田	閨子
会へさうで会へぬ吉野の帰り花	同		
聞耳を立てゐるごとく冬木の芽	神戸	後藤	立夫
句まで枯れて干菜といへるもの	同		
いつ来ても茶の花畑に人見えず	熱海	嶋田	一步
茶の花や新幹線のまた通る	同		
阿波の野をおほひし昔藍の花	徳島	上崎	暮潮
わが住める町の灯の海後の月	同		
袴著の胸に大きな守り札	箕面	中谷	まもる
土を聞き土と話して冬耕す	同		

子選

天地有情句評

汀子

帰り来し浜田の神の椎拾ふ 福山 竹下陶子

ふるさとの宮を訪ねた作者の郷愁。

雪時雨きて何もかも失ひし 岩見沢 奥田智久

厳しい雪国の現実。

退任の帰山も祝ひ炉を開く 長岡 安原 葉

立派に大役を全うされた作者を祝う帰山の人々。

人恋ひの暮らしも長く夕時雨 仙台 赤川 誓城

震災の復興も遅々とした歲月の推移。

梅雨空を引つ張つてゐる橋の先 東京 稲畑廣太郎

梅雨空を見ている作者の位置の面白さ。

流星を見逃さない。

流星に目の焦点の合ひ初めし 周南 小川 龍雄

炉開や塵なき炉辺の塵払ひ 神戸 長山あや

炉開きのお手前。

海光に生れては消ゆる帰り花 東京 河野美奇

海辺で見つけた振り返り花との出会い。(以下略)